

〔原 著〕

## 保健体育科教員養成課程入学者の体育学習観に関する調査研究： 教職志望度の差異に着目して

白石 智也<sup>1</sup>・房野 真也<sup>1</sup>・森木 吾郎<sup>1</sup>・高田 康史<sup>1</sup>

前田 一篤<sup>1</sup>・松本 佑介<sup>2</sup>・藤島 廉<sup>3</sup>

### A Survey on the Conceptions of Learning in Physical Education Among Students Entering Teacher Training: Focus on Different Teaching Aspirations

Tomoya SHIRAISHI, Shinya BONO, Goro MORIKI,

Yasufumi TAKATA, Kazuma MAEDA, Yusuke MATSUMOTO, Ren FUJISHIMA

#### Abstract

The purpose of this study was to investigate the conceptions of learning in physical education (PE) among students in a PE teacher training course. In addition, the relationship between their conceptions of learning in PE and teaching aspirations was examined. As a result, the following three points were clarified. First, students attending the course have accumulated learning of PE and have had a positive impression of PE classes; therefore, they should have higher scores than junior high school students on their conceptions of learning in PE. Then, students in teacher training should be more likely to recognize PE as a subject that they have studied in junior high and high school. Finally, students who are highly motivated to become PE teachers should be more likely to have conceptions of communication skills and knowledge about the body and physical exercise compared to other students.

#### Keywords

Physical education teacher training course, Entering student, Conceptions of learning on physical education, Teaching aspirations

保健体育科教員養成, 入学者, 体育学習観, 教職志望度

## 1. はじめに

2012年, 中央教育審議会(以下「中教審」と略す)<sup>1)</sup>は, 「教職生活全体を通じた教員の資質能力

の総合的な向上方策について(答申)」の中で, 我が国の教育現場において「学び続ける教師像」の確立が不可欠であると主張した。この「学び続ける教師像」とは, 教師自身が教職生活の中で実

<sup>1)</sup> 広島文化学園大学人間健康学部 (Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

<sup>2)</sup> 広島大学大学院人間社会科学部研究科博士課程後期

(Doctoral Course, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University)

<sup>3)</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

(Master Course, Graduate School of Education, Hiroshima University)

実践的指導力を高めるとともに、急速に進展している社会の中で、絶えず知識や技能を探究し、刷新し続ける存在であることと示されている<sup>1)</sup>。要するに、教師という職業においては、自分自身で教師としての力量を高めていく必要があると換言できよう。

では、教師としての力量とは何か。専門的な知識や熟達した技能などを指す研究者もいるが<sup>2,3)</sup>、それらに加えて、授業についての信念が挙げられる<sup>4)</sup>。また、木原<sup>5)</sup>は、「授業力量の特徴モデル」として、「授業技術」、「授業についての知識」、「授業に関する信念」という3つの区分を示し、その中でも「授業に関する信念」を中核に据えている。以上のことから、教師としての力量、とりわけ、授業に関する力量の中において、授業に関する信念が重要な役割を果たしていることが窺える。

江藤<sup>6)</sup>は、秋田<sup>7)</sup>の考えを援用した上で、この授業に関する信念に支えられているのが、授業観や教材観、指導観などであるとしている。また、教師としての力量を向上させるために、指導観の形成は重要なファクターとして捉えられており<sup>8)</sup>、教員養成段階における学生の指導観に関する研究は、様々な教科において蓄積が進められてきた<sup>9,10)</sup>。その中でも、体育に関する指導観の研究は多くみられ、江藤<sup>6)</sup>は、体育に関する指導観を、「体育授業を行う上で大切だと思うこと」(p.93)と定義している。この体育に関する指導観は、教育実習の経験や教科の指導法に関する科目での授業に影響を受けて形成されたり、変容したりする可能性が示唆されている<sup>6,11)</sup>。これらは、学生が実際に体育を教えること、また、体育を教えることについて学ぶことの中から、指導観が形作られていくと言い換えることができよう。したがって、保健体育科教員養成段階の学生が有する指導観の研究は、教育実習や教科の指導法に関する科目を編成する際にも、非常に有益であると考えられる。

さらに、三島ほか<sup>12)</sup>によると、教員養成課程の学生の多くは、教育実習を機に、教職志望度が著しく変化するといわれている。つまり、教員を

志望する学生にとって、教育実習での経験は、教員を志す上で大きな糧になっているといえる。そのため、教育実習までに、教師としての力量の中核を担う指導観を、ある程度形成しておくことは重要であると推察される。よって、学生の入学時から教育実習までの指導観の変容を追って調査していく意義は十分にあると考えられる。しかし、大学に入学して間もない学生（以下「入学者」と略す）は、教員養成課程に属しているといっても、学習者としての経験しか有しておらず、指導者としての経験は欠如しているため、指導観を調査することは困難であるといえよう。

他方、学習観とは、「学習とはどのようなものか」(p.17)<sup>13)</sup>に関する学習者自身の考えと定義することができる。体育学習観に関する先行研究としては、小野ほか<sup>14)</sup>が実施した中学校の体育授業における学習観と学習方略の関連に係る研究が挙げられる。その中で小野ほか<sup>14)</sup>は、「中学生用体育学習観尺度」の開発に取り組んでおり、『「学習とはどのようなものか」という問いを軸」(p.216)として体育学習観を調査している。つまり、体育授業において学ぶこと、また、得られることに関する考えを、体育学習観と捉えることができよう。さらに、単元前に学習観を調査することは、学習者の実態を把握することに繋がり、指導方法を検討する際に有効であるとされている<sup>14)</sup>。

この学習観に関して伊藤・伊東<sup>9)</sup>は、「どのような学習観を持つのか調査することは間接的にはあるが、指導観を調査することができると言える」(p.51)と述べており、学習観の調査は、指導観の調査の前段階として適していると考えられる。しかしながら、教員養成課程入学者の指導観や学習観について調査した研究は管見の限り見当たらず、その蓄積は進んでいないといわざるを得ない。

以上のことから、本研究では、保健体育科教員養成課程入学者の体育学習観について調査することを目的とする。また、その中でも、教職志望度と体育学習観にどのような関連があるかについても検討していく。

## 2. 方法

### 2.1. 調査時期と調査対象

調査時期は、2020年4月22日であった。

調査対象は、A大学B学部に所属する1年生の中で、教科に関する科目の体育実技科目である「球技：ゴール型（サッカー）」の授業を受講している131名であった。本調査は、本科目の初回の授業で実施された。有効数は、欠席者及び回答がなかったものを除く127名であった。

### 2.2. 調査内容と調査方法

調査内容は、①対象者の属性、②教職志望度（「なりたい・どちらでもない・なりたくない」の3件法）、③体育学習観、であった。

③については、小野ほか<sup>14)</sup>が開発した「中学生用体育学習観尺度」を用いた。具体的には、5因子22項目からなる質問項目に対して、対象者の

考えにどの程度当てはまるか、「強くそう思う（4点）」、「そう思う（3点）」、「そう思わない（2点）」、「まったくそう思わない（1点）」の4件法で回答を求めた。この尺度については、中学生用に開発されたものであるが、本研究の対象者は大学1年生であり、本調査時期は、大学において受講する全ての体育実技授業が実施される前であった。したがって、その時点における体育学習観に関しては、中学校と高等学校において形成されていると捉えることができる。そのため、本尺度が適用できる範囲内であると考え、本研究においても採用した。また、小野ほか<sup>14)</sup>によると、学習観は、改めて問われることがなければ、それに対して自覚的になることは難しいという。よって、保健体育科教員養成課程入学者の体育学習観を調査することは、今後、体育を「教える」立場になる者にとって、改めて体育を「学ぶ」ことについて省みる機会にもなると考えた。なお、表1

表1. 体育授業における学習観の調査項目一覧

因子1：運動技術の習得
(1) 体育の授業では、運動やスポーツの戦術を身につける
(2) 体育の授業では、体の上手な動かし方を身につける
(3) 体育の授業では、うまく運動するためのコツを身につける
(4) 体育の授業では、色々な用具を使った運動の仕方を身につける
(5) 体育の授業では、色々な種類の運動の仕方を身につける
因子2：コミュニケーション能力の涵養
(6) 体育の授業では、他者と理解することの大切さを学ぶ
(7) 体育の授業では、他者と協力することの大切さを学ぶ
(8) 体育の授業では、他者から教わるときの態度を学ぶ
(9) 体育の授業では、他者との心の距離の取り方を学ぶ
(10) 体育の授業では、他者へのアドバイスの仕方を学ぶ
因子3：身体と運動に関する知識の修得
(11) 体育の授業では、運動やスポーツのマナーについて学ぶ
(12) 体育の授業では、運動やスポーツの成り立ちについて学ぶ
(13) 体育の授業では、運動やスポーツが心身に与える影響・効果について学ぶ
(14) 体育の授業では、運動やスポーツの意義について学ぶ
(15) 体育の授業では、運動やスポーツのルールについて学ぶ
因子4：運動の魅力の感受
(16) 体育の授業では、運動することの喜びを味わう
(17) 体育の授業では、勝敗を競う楽しさを味わう
(18) 体育の授業では、運動することの楽しさを味わう
因子5：身体能力の向上
(19) 体育の授業では、持久力を養う
(20) 体育の授業では、筋力を養う
(21) 体育の授業では、体の柔軟性を養う
(22) 体育の授業では、瞬発力を養う

は、体育学習観の調査項目の一覧である。

調査は、株式会社ネットマンが提供しているCラーニングの「アンケート」機能を用いて実施した。Cラーニングは、多くの大学で活用されているオンライン学習支援システムである<sup>15)</sup>。

### 2.3. 分析方法

分析は、教職志望度を「志望度高群（65名）」、「未確定群（44名）」、「志望度低群（18名）」の3群に分け、各因子における平均得点を従属変数、教職志望度を独立変数として、因子ごとに1要因の分散分析を行った。また、有意差が認められた因子に関しては、Tukey法による多重比較検定を実施した。統計処理には、IBM SPSS Statistics Version26を用いた。なお、本研究における有意水準は全て5%未満とし、1要因の分散分析における効果量 $\eta^2$ （効果量小>.01, 効果量中>.06, 効果量大>.14）及び多重比較検定における効果量 $r$ （効果量小>.10, 効果量中>.30, 効果量大>.50）を測定した。

### 2.4. 倫理的配慮

対象者に対し、本調査は成績評価とは一切関係がないことや、成果公表時に個人の氏名が公表されることはないことなどを事前に周知した上で実施した。なお、本研究は、広島文化学園大学人間健康学部倫理審査委員会の承認を受けている（承認番号：HS-2020001）。

## 3. 結果

表2は、各因子における全体の平均得点及び標

準偏差を示したものである。

1要因の分散分析の結果、「コミュニケーション能力の涵養」（ $F = 6.34$ ,  $df = 126$ ,  $\eta^2 = .29$ ）について、1%水準で有意差がみられ、「身体と運動に関する知識の修得」（ $F = 4.50$ ,  $df = 126$ ,  $\eta^2 = .21$ ）及び「運動の魅力の感受」（ $F = 3.22$ ,  $df = 126$ ,  $\eta^2 = .15$ ）について、5%水準で有意差がみられた。教職志望度別における各因子の平均得点、標準偏差、有意差、効果量 $\eta^2$ は、表3に示す通りである。

続いて、1要因の分散分析において有意差がみられた「コミュニケーション能力の涵養」、「身体と運動に関する知識の修得」、「運動の魅力の感受」の3つの因子について、多重比較検定を実施した。その結果、「コミュニケーション能力の涵養」について、「志望度高群」のほうが、「未確定群」よりも5%水準で有意に高い得点を示し（ $df = 107$ ,  $r = .11$ ）、同様に、「志望度高群」のほうが、「志望度低群」よりも、5%水準で有意に高い得点を示した（ $df = 81$ ,  $r = .15$ ）。さらに、「身体と運動に関する知識の修得」について、「志望度高群」のほうが、「未確定群」よりも5%水準で有意に高い得点を示した（ $df = 107$ ,  $r = .26$ ）。「運動の魅

表2. 各因子における全体の平均得点及び標準偏差（ $n = 127$ ）

	M	SD
運動技術の習得	3.62	0.46
コミュニケーション能力の涵養	3.65	0.41
身体と運動に関する知識の修得	3.65	0.43
運動の魅力の感受	3.72	0.38
身体能力の向上	3.34	0.58

表3. 1要因の分散分析の結果（ $df = 126$ ）

	志望度高群 ( $n = 65$ )		未確定群 ( $n = 44$ )		志望度低群 ( $n = 18$ )		F値	効果量 ( $\eta^2$ )
	M	SD	M	SD	M	SD		
運動技術の習得	3.68	0.50	3.57	0.41	3.50	0.41	1.34	.06
コミュニケーション能力の涵養	3.77	0.36	3.56	0.41	3.44	0.47	6.34**	.29
身体と運動に関する知識の修得	3.76	0.37	3.51	0.48	3.61	0.43	4.50*	.21
運動の魅力の感受	3.80	0.34	3.65	0.39	3.59	0.45	3.22*	.15
身体能力の向上	3.38	0.65	3.32	0.56	3.25	0.41	0.35	.02

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

表 4. 1 要因の分散分析において有意差がみられた因子に係る多重比較検定の結果 (df = 126)

	コミュニケーション 能力の涵養	身体と運動に関する 知識の修得	運動の魅力の感受
志望度高群 (n = 65)	3.77 ± 0.36	3.76 ± 0.37	3.80 ± 0.34
未確定群 (n = 44)	3.56 ± 0.41	3.51 ± 0.48	3.65 ± 0.39
志望度低群 (n = 18)	3.44 ± 0.47	3.61 ± 0.43	3.59 ± 0.45

\* p &lt; .05, \*\* p &lt; .01

表 5. 小野ほか (2018) が実施した体育学習観に関する調査結果  
【小野ほか (2018) を参照し、筆者作成】

	体育が好き (n = 1,681)		どちらでもない (n = 296)		体育が嫌い (n = 461)	
	M	SD	M	SD	M	SD
運動技術の習得	3.17	0.62	2.77	0.63	2.65	0.69
コミュニケーション能力の涵養	3.02	0.63	2.57	0.62	2.44	0.70
身体と運動に関する知識の修得	3.14	0.61	2.80	0.59	2.72	0.62
運動の魅力の感受	3.29	0.64	2.72	0.63	2.34	0.74
身体能力の向上	3.06	0.66	2.79	0.62	2.56	0.74

力の感受」については、それぞれの群間で有意差はみられなかった。各因子におけるそれぞれの平均得点、標準偏差、有意差は、表 4 に示す通りである。

## 4. 考察

### 4.1. 全体の傾向について

体育学習観に関する先行研究として挙げた小野ほか<sup>14)</sup>は、中学生に対して本研究と同様の調査を実施している。表 5 は、小野ほか<sup>14)</sup>の先行研究における体育学習観の調査結果であり、体育授業の好き嫌いによる差異が示されている。これを本研究の結果と照らし合わせると、5つの因子全てにおいて、本研究の平均得点のほうが高い値を示していることがわかる。

本研究の調査対象者は、教職志望度に差異はあるものの、中学校及び高等学校（保健体育）の教員免許状取得のために必要な科目を受講している学生であった。そのため、比較的スポーツ経験が豊富であり、中学校や高等学校で受けていた体育

授業に対しても、肯定的な印象を抱いていると推察される。

加えて、小野ほか<sup>14)</sup>の調査においては、学年ごとの差異についても検討しており、学年が高くなるにつれて得点が有意に高くなったという。その理由として、「学年段階に伴う学習の積み重ねの差」(p.231)を挙げている。以上のことから、体育の学習を積み重ねてきた大学生を対象とした本研究では、中学生よりも高い得点を示したと考えられる。

他方、本研究における全体の平均得点を概観すると、「身体能力の向上」の因子と比べ、他の4つの因子のほうが高い得点を示していることがわかる。小野ほか<sup>14)</sup>によると、本研究で用いた尺度は、友添<sup>16)</sup>が挙げている教科内容領域の構成要素と類似しており、「技術学習」＝「運動技術の習得」、「社会学習」＝「コミュニケーション能力の涵養」、「認識学習」＝「身体と運動に関する知識の修得」、「情意学習」＝「運動の魅力の感受」と対応しているという。要するに、教科内容領域の構成要素と対応していない「身体的能力の向上」

よりも、教科内容領域の構成要素と対応している他の4因子の平均得点が高いということである。このことから、保健体育科教員養成課程の入学者は、教科内容領域の構成要素、つまり、「教科としての体育」で学ぶべき内容を、体育学習観として有していたと考えることができ、これらは、体育指導観に変容していく考えであると捉えられよう。

#### 4.2. 教職志望度による差異について

本研究の結果、「コミュニケーション能力の涵養」の因子では、「志望度低群」及び「未確定群」と比べて、「志望度高群」が有意に高い得点を、「身体と運動に関する知識の修得」の因子では、「未確定群」と比べて、「志望度高群」が有意に高い得点を示していた。このことから、保健体育科教員を志す学生は、その他の学生と比べて、「体育授業では態度面や認知面を成長させることができる」という体育学習観を有していると考えられる。また、「身体と運動に関する知識の修得」の因子で、「志望度高群」が「未確定群」よりも有意に高い得点を示していることに着目すると、保健体育科教員を志すか迷っている入学者は、保健体育科教員になりたいと考えている入学者と比べて、「知識」に関する体育学習観を有している人数が少ないと推察される。他方、嘉数・岩田<sup>17)</sup>によると、教員養成段階の学生が保持する「知識」に関する体育授業観は、教育実習を通して変化するという。具体的に、学生は教育実習を通して、「技能を向上させるために必要な知識を学ぶことができる授業」を、良い授業と捉えるようになるとされている<sup>17)</sup>。したがって、保健体育科教員を志すか迷っている学生について、入学時は「知識」に関する体育学習観を有していないとしても、教育実習を経験することで、「知識」に関する体育指導観及び体育授業観は形成されていく可能性が高いといえよう。

一方で、生徒同士がアドバイスをすることができる授業や、仲間との協調性が身につく授業など、「コミュニケーション能力の涵養」の因子に関わ

る授業観については、教育実習を経て、認知面や技能面に関する授業観に変容していく傾向がみられるという<sup>17)</sup>。しかしながら、中学校及び高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編においては、「主体的・対話的で深い学び」という文言が強調され、それに伴うグループ学習などの重要性が明記されている<sup>18, 19)</sup>。そのため、保健体育科教員を志す学生が有する「コミュニケーション能力の涵養」に関わる学習観に関して、教育実習を経験した後も維持できるように、教科の指導法に関する科目等で指導を行っていくべきであると考えられる。

#### 5. おわりに

本研究では、保健体育科教員養成課程入学者の体育学習観について調査すること、また、その中でも、教職志望度と体育学習観にどのような関連があるか検討することを目的とした。結果として、大きく以下の3点が明らかになった。

- 1) 体育の学習の積み重ねがあり、また、体育授業に対して肯定的な印象を抱いている保健体育科教員養成課程入学者は、体育学習観に関して、中学生よりも高い得点を示すこと。
- 2) 保健体育科教員養成課程入学者は、教科内容領域の構成要素、つまり、「教科としての体育」で学ぶべき内容を、体育学習観として有している可能性が高いこと。
- 3) 教職志望度の高い学生は、その他の学生と比べて、「体育授業では態度面や認知面を成長させることができる」という体育学習観を有していること。

本研究では、単一の大学及び学部の入学者を対象として調査が行われた。他大学における事例も蓄積されることで、より信憑性の高い示唆が得られると推察される。また、縦断的な調査を行うことで、それぞれの大学における教科の指導法に関する科目や教育実習の特色及び課題についても明らかになろう。さらに、この学習観の調査を指導観の検討に結び付ける方策に関しても、議論して

いく必要があると考えられる。

## 付記

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題研究番号：20K02887）の補助を受けて行われた。

## 引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会（2012）『教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）』文部科学省。
- 2) 佐藤学（2009）『教師花伝書－専門家として成長するために－』小学館。
- 3) 佐藤幹男（2002）「教師の力量を高める」日本教師教育学会編著『教師として生きる：教師の力量形成とその支援を考える』学文社，pp.81-93。
- 4) 吉崎静夫（1997）『デザイナーとしての教師アクターとしての教師』金子書房。
- 5) 木原俊行（2004）『授業研究と教師の成長』日本文教出版。
- 6) 江藤真生子（2019）「小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究－養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して－」『日本教科教育学会誌』42巻3号，pp.83-94。
- 7) 秋田喜代美（2000）「教師の信念」日本教育工学会編著『教育工学辞典』実教出版，p.194。
- 8) 成家篤史・鈴木直樹・石塚諭（2018）「体育の指導観形成における組織内の教師間の関係性に関する研究－小学校教師に着目して－」『体育科教育学研究』34巻1号，pp.1-16。
- 9) 伊藤真帆・伊東英（2014）「教員養成課程の学生の小学校外国語活動の指導観－英語学習観の観点から－」『岐阜大学カリキュラム開発研究』31巻1号，pp.51-61。
- 10) 清水優菜・山本光（2017）「教員養成課程の学生が有する指導観に関する研究」『教育デザイン研究』8号，pp.120-124。
- 11) 佐藤裕・西村清巳（1978）「教育実習生の授業技術の変容過程と指導観の変容態様について」『体育学研究』23巻2号，pp.121-128。
- 12) 三島知剛・山口あゆみ・森敏昭（2009）「教育実習生の教職志望度に関する研究－実習生の授業・教師イメージ・教師効力感・実習の自己評価に着目して－」『学習開発学研究』2号，pp.11-18。
- 13) 鈴木正博（2010）「ミクロ・ポリティクスの視覚による学校の組織・文化研究の再検討」『東京大学大学院教育学研究科紀要』50巻，pp.295-304。
- 14) 小野雄大・友添秀則・高橋修一・深見英一郎・吉永武史・根本想（2018）「中学校の体育授業における学習者の学習観および学習方略の関連に関する研究」『体育学研究』63巻，pp.215-236。
- 15) ネットマン（online）『アクティブラーニングを実現「Cラーニング」』ネットマンHP。  
<https://www.netman.co.jp/clearning>（参照日：2020年5月13日）。
- 16) 友添秀則（2010）「体育の目標と内容」高橋健夫ほか編著『新版体育科教育学入門』大修館書店，pp.30-38。
- 17) 嘉数健悟・岩田昌太郎（2013）「教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究－教育実習の前後に着目して－」『体育科教育学研究』29巻1号，pp.35-47。
- 18) 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編・体育編』東山書房。
- 19) 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編・体育編』東山書房。